紀伊民報

2006年(平成18年)1月25日 水曜日 第18962号 (10)

自然の大切さ学ぶ

会津川で水質調査

田商が三栖小、高雄中と

会津川の水質やホタルの研究など、水辺の環境を調べた成果を発表する三栖小学校4年生
(田辺市新庄町のビッグ・ユーで)

田辺商業高校は21日、田辺市新庄町の県立情報交流センター「ビッグ・ユー」で、市内の三栖小学校、高雄中学校と連携して調査した、会津川の水質について結果を発表した。児童や生徒は自然の大切さを実感し、環境保全を訴えた。

学校関係者、県や市の職員、県内の高校理科研究会に所属する教員、会津川の環境に取り組むNPOや住民、保護者ら約50人が参加した。

3校は、水辺の環境学習として連携し、会津川の上流、中流、下流で定時定点で水質調査をした。

三栖小4年生7人は、「ホタルのすむ里」をテーマにホタルの生態や水生生物の採取、川の流れの速度、成分分析などから水質を調査。「農業や工業排水、生活排水が水質汚染の大きな原因。身近な生き物に環境がすぐに反映している」と述べた。

高雄中技術科学部4人は、生物調査で会津川で絶滅したと思われていたシロウオを発見したことなどを発表。「川の合流部の水質が汚れており、成分調査でも人家が増える下流ほど汚染が進んでいる。しかし、以前と比べるとずいぶんきれいになってきている」と説明した。

田辺商の生物部8人は田辺湾を含めた会津川の水質を調査。「会津川は、中、下流に汚染が見られ、決してきれいな川とは言えない。田辺湾はその地理的条件からも日本でも数少ない生物の宝庫。自然の維持には山、川、海の広い視野で考えなければ」とまとめた。

講評で、京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所長の白山義久教授は「データを取り続けることで活動がさらに発展し、環境教育の深みも増す。環境保全には住民、行政、学校が連携し、現状を知って取り組まなければならない。会津川の生き物と水を見守り続けてほしい」と語った。

◇

田辺商業は2003年から3年間、アメリカの学校と環境をテーマに共同研究を深めたり、同じ関心を持つ地域機関と連携して学んだりする国の支援事業を受けた。フロリダ州ナイスビル高校と「昆虫と土壌の調査」を実施。テレビ会議や合宿で交流を深め、京都大、近畿大、和歌山大とも合同で調査活動をした。水辺の環境学習も同事業で2年間、三栖小と高雄中とともに取り組んだ。